

2021. 6. 27 (日) マタイ26:6~13

26:6 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられると、

26:7 ある女の人が、非常に高価な香油の入った小さな壺を持って、みもとにやって来た。そして、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。

26:8 弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんな無駄なことをするのか。

26:9 この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」

26:10 イエスはこれを知って彼らに言われた。「なぜこの人を困らせるのですか。わたしに良いことをしてくれました。

26:11 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいます。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。

26:12 この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです。

26:13 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

<説教>

主イエス・キリストは天の父なる神のみこころに従って十字架につけられるために引き渡されようとしておられ、その時は間近に迫っていました。(26:2)

この過越の祭りの時に、イエス・キリストが本当の過越の子羊—私たちの罪の贖いのためのそなえもの—として自ら屠られようとしておられたのです。

そんなことはつゆ知らない祭司長たちや民の長老たちが大祭司カヤパの邸宅に集まって、イエスをだまして捕らえ殺そうと策略を巡らします。(26:3-5)

それはただイエスに対するねたみ、憎しみだけからでした。

そんな時、彼らと全く正反対の〈ある女の人〉がイエスに奉仕をし、その奉仕をイエスが受け入れてくださり、その大きな意味を説き明かしてくださったことが今日の聖書箇所に記されています。

イエスは〈ベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられ〉(26:6)ました。

並行記事であるヨハネ 12 章を見ると、そこはイエスが死人の中からよみがえらせたラザロとその姉妹マルタとマリヤの家だったかもしれません。

そしてマタイ (マルコ 14 章でも) が言う〈ある女の人〉とはマリヤだということが分かります。

しかしマタイ (マルコも) は彼女の名を記さず、ただ〈この人がしたこと〉(26:13)、イエスに対して〈良いことをしてくれた〉(26:10)ことだけを記しています。

ここではイエスに対して彼女が〈したこと〉が〈良いこと〉だったとイエスご自身が判断、評価し、その意味までも解き明かし教えてくださったということが大事なのです。

彼女が〈したこと〉〈良いこと〉、それは、〈非常に高価な香油の入った小さな壺を持って、みもとにやって来た。そして、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ〉(26:7)ということでした。

女がそうした理由についても書かれていません。

想像すれば、あえて、わざわざ〈ツアラアトに冒された人〉の家に来てくださったあわれみ深く慈しみ深いイエスに対する感謝と喜びからだったと考えられます。

彼女がイエスの頭に注いだ〈香油〉は〈非常に高価な〉ものでした。

さて、〈弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんな無駄なことをするのか。この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」〉(26:8,9)

彼女にすれば感謝と喜びをもって、ひたすら「善かれ」と思っていたことだったでしょう。

しかし〈弟子たち〉の〈憤慨—いきどおりなげく、ひどく腹を立てる—〉した様子に驚き、言い返すこともできなかつたのでしょう。

また、〈この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに〉という彼らの言い分にも一言葉の上では—見まともであり、一応の理はあったとも言えます。

彼女が〈困る〉のは無理もないことでした。(26:10)

〈イエスはこれを知って彼らに言われ〉ました。(26:10)(13まで)

まず「わたしに良いことをしてくれました。」(26:10)とイエスが宣言し、評価して下さったことが大事です。

〈弟子たち〉の一見まともな評価はイエスによって退けられました。

一方、想像したような彼女の感謝や喜び、また「善かれ」という思いそれ自体が殊更に尊いというのでもありません。

もちろん、いやいや渋々悪意をもって、などは論外ですが、しかし一般的に言っても、私たちが「善かれ」と思っていることが本当に神にとって(そして時には人にとっても)善いことなのかどうか、時には立ち止まって考えることは必要でしょう。

とにかく大事なものは、彼女が更に感謝と喜びをもって受けるべきは、イエスが〈わたしに良いこと〉と言ってく下さったことです。

すぐ前の「羊とやぎ」の審判のときもイエスの判断基準は〈わたしにした〉かどうかということでした。

もちろん、そのときそのときにみことばと聖霊の導き助けを祈り求めて信仰によって判断、決定していくことではあります。

しかし、その時すぐなのか、または最長(羊とやぎのように、麦と毒麦のように)最後の審判の時まで待たなくてはならないのかわかりませんが、事の善し悪しの判断は最終的にはイエスによってなされるのです。

そしてイエスは彼女の〈したこと〉について、彼女が意識もしていなかった重大な意味を明らかにし、解き明かされました。

〈この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです。〉(26:12)と。

イエスを〈埋葬する備え〉、これが彼女が「知らずに」した、しかしイエスによれば(ということはそれが本来の、本質的な)、イエスがお与えになった本当の意味でした。

「彼女はイエスを見て、イエスの死の間近なのを(いわば霊的に)直感してイエスに香油を注いでイエスの埋葬の備えをしたのだ」という解説もありますが、そういう面もあったと思いますが、それもイエスの言葉による判定があったからこそでしょう。

そして〈わたしを埋葬する〉と言われることで、弟子たちに、ご自分が十字架につけられるために引き渡されて、十字架で死なれるということを改めて思い起こさせようとなさったのです。

〈わたしはいつも一緒にいるわけではありません。〉と言われたのは、その時がもうすぐ迫っていたからです。

最後に〈世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる〉と言われましたが、これは「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」(24:16)とのみことばを思い起こさせます。

ですから、〈この人がしたことも、この人の記念として語られます。〉とは、何と云っても、終わりの時に栄光を帯びて来られ、栄光の座に着かれ、審判なさるイエスによって彼女は〈覚えられている〉(cf.使徒 10:4)ということです。

そして、そんな人の幸いが 〈この福音が宣べ伝えられ〉ている私たちによっても覚えられ、〈語られ〉、思い起こされ、確認されるということです。

それなら、私たちも、私たちの罪のために十字架につけられるために引き渡され、十字架で死に、よみがえってくださり、この女の人と同じ幸いに召してくださっているイエス・キリストに感謝と喜びを捧げ、献金を捧げ、自分自身を捧げてイエスに奉仕するのです。